

『薬師寺縁起』金堂条の解釈

著者	望月 望
雑誌名	美術史学
号	42
ページ	27-35
発行年	2021-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00131208

『薬師寺縁起』金堂条の解釈

望月 望

はじめに

『薬師寺縁起』金堂条では、「已上持統天皇奉造請坐者、已上流記文云、今畧抄之、」が最も重要な文である。この文については、関野貞氏が明治三十四年（一九〇一）の論文で問題を提示してから、さまざまな議論があつたが、なお明快な答えが出ていたとは思われない。しかし、これまで全く注目されなかった「今畧抄之」の用法に留意してこの文を読めば、文の構造と正確な意味が理解される。その結果、この文には関野氏の挙げた問題点は、初めから存在しなかったことが明らかに、「已上持統天皇奉造請坐者」の信憑性に対する疑念も払拭されることになる。そしてそれは、奈良薬師寺の金堂薬師三尊像の造立が持統朝であることを意味する。第一節で以上の諸点について述べる。第二節では、前半で大安寺資財帳の奥書の一部を読む。これは、筆者が流記資財帳を理解するためのものである。節の後半で『諸寺縁起集』中の薬師寺舊流記資財帳に

ついて考察する。第三節では、第一節で見た略抄文「已上持統天皇奉造請坐者」の、流記における原文の推定・復原を行う。

一、「已上持統天皇奉造請坐者、已上流記文云、

今畧抄之、」について

長和四年（一〇一五）頃に成った『薬師寺縁起』には、主要な写本が三種類ある。薬師寺本『薬師寺縁起』²と、醍醐寺本及び護国寺本の『諸寺縁起集』にある『薬師寺縁起』である。以下、後者の二本をそれぞれ、醍醐寺本の『薬師寺縁起』と護国寺本の『薬師寺縁起』と呼ぶ。ここでは薬師寺本を用い、必要に応じて他本を参照する。次に、重要な一用語について注意しておく。薬師寺本『薬師寺縁起』金堂条の文末近くで「奉造鑄坐者」となっている表記を「奉造請坐者」とした。これは以後全ての記述で用いる。同本『薬師寺縁起』の講堂条では「奉造而請坐者」、同本の食堂条では「奉造請坐於此寺」となっており、また醍醐寺本『薬師寺縁起』では「奉造

請坐」(『校刊美術史料』の註記による)、護国寺本『藥師寺緣起』では「奉造請坐者」となっている。更に大安寺の資財帳(後述)には「奉造而請坐者」と「奉造請坐者」の両方の例がある。よって「奉造請坐者」としても問題はないと判断した。

『藥師寺緣起』の金堂条を次に挙げる。括弧(・・・)は二行割り注を示す。

一、金堂一字、二重二閣、五間四面、長(八丈七尺五寸、或七丈八尺)、廣(四丈、或五丈一尺五寸、或五丈一尺、或四丈五尺)、柱高一丈九尺五寸、佛壇長三丈三尺、廣一丈六寸、高一尺八寸、以馬腦爲鬘石、以瑠璃爲地敷之、以黃金爲繩界道、以蘇芳造高欄、以紫檀爲內殿天井隔子、以鐵繩鈞天蓋、寶蓋四端交立白輝寶珠及半月等、不可稱計、其堂中安置丈六金銅須弥座藥師像一軀、円光中半出七佛藥師佛像、火炎間刻造無數飛天也、左右脇士日光遍照月光遍照并像各一軀、已上持統天皇奉造請坐者、已上流記文云、今畧抄之、

関野氏は先述の論文で、藥師寺緣起なる史料から一文を引用し、問題点を指摘している。引用文の一部を挙げると、

其堂中安置・・・各一軀、已上持統天皇奉造請坐者、已上流記文畧抄之

となっており(傍点は関野氏による)、関野氏は

・・・「已上持統天皇奉造請坐者」とは流記にありたりし者を轉載せし者なりや大に疑ふべき者あり・・・

と述べている(以下、傍点省略)。引用文の「已上持統天皇奉造請坐者」の「已上」は、直前の藥師三尊像の記述を指す、と取るのが一般的である。しかしこの場合は、端的に藥師三尊像を表している、と理解するべきで、そうでなければ意味が通らない。この「已上」を書いた藥師寺緣起の作者は、「奉造請坐者」の意味をよく知っていたのである。

関野氏は、引用文中の「已上持統天皇奉造請坐者、已上流記文」を読み、「已上持統天皇奉造請坐者」は流記文である、との意味に解した。それから「已上持統天皇奉造請坐者」は流記にあった文を藥師寺緣起に転載したもの、と受け取ったが、天皇の諡号の問題もあって、「已上流記文」とする記述に大きな疑念を抱いたのである。無論それは、「已上持統天皇奉造請坐者」の信憑性に対する疑いに他ならない。しかし、藥師寺緣起の作者は、「已上持統天皇奉造請坐者」は流記文である、と書いたのではなく、従って、「已上持統天皇奉造請坐者」の信憑性に問題は生じないのである。以下、その間の事情について述べよう。

『藥師寺緣起』が書写されたのは、醍醐寺本が建永二年(一二〇七)、藥師寺本の本体が寛元元年(一二四三)、護国寺本が康永三年(一

三四四) かまたは同四年であつて、各本の末尾は次のとおりである。

醍醐寺本

〈已上持統天皇奉造請坐者、已上流記文今略抄之、

薬師寺本

已上持統天皇奉造請坐者、已上流記文云、今畧抄之、

護国寺本

已上持統天皇奉造請坐者、已上流記文畧抄之

書写年の古い方から観察して、長和の『薬師寺縁起』には「今の語があつたと考えられるから、ここから先も、薬師寺本を『薬師寺縁起』として用いる。関野氏の引用文における用語の特徴は、薬師寺本を示唆している。しかし文末が相違するから、薬師寺本の用語で書き直して記すと、次の形となる。

已上持統天皇奉造請坐者、已上流記文云、今畧抄之、

引用文の傍点から察するに関野氏は、「已上流記文云」の「已上」は「已上持統天皇奉造請坐者」を指す、と解釈した。筆者も同じ解釈で右の文を読む。この「已上」の示す範囲を一般にAとすると、「A、已上流記文云、今畧抄之」を読むことになるが、Aは少なくとも「已上持統天皇奉造請坐者」を含むから、右の文は必ず読まねばならない。つまり普遍的である。また文言の重要性とも相まって、右の文

は、金堂条中の最も基本的な文である。「今畧抄之」(今之を略抄せり)の「畧抄」は、「概略を書き写す」の意と解される。しかし、あまり厳密に考える必要はない。ここで重要な語は「今」である。「今」は、前で述べた内容に対して、現状が異なっていることを述べる逆接の接続詞で、「しかし実際は、ところが現在では」などと訳される⁴⁾。そのことを考慮して右の文を読んだものを、ここに挙げる。

已上持統天皇奉造請坐者と流記文に云う。しかし実際は、流記文を略抄したものである。

この文は(無論、原文も)、「今」によって前半と後半に分けられる。『薬師寺縁起』の作者は、前半に記した文「已上持統天皇奉造請坐者、已上流記文云」を、後半で一旦否定して、「已上持統天皇奉造請坐者」は「之」(流記文)を略抄したものだと述べる。それに従って前半の文を再読すると、流記文ではない略抄文「已上持統天皇奉造請坐者」に対して、「已上流記文云」と言っているのである。その意味については、「已上持統天皇奉造請坐者」の内容が流記文に表されていること、と理解すればよい。またそれ以外には考えられない。現代人が古文の説明をする時、その文を現代文(Mとする)に書き直して、「原文にはMと書いてある」と言う。それと同じである。長和の人人も令和人と同じ考え方をしていたのである。略抄

文で持統天皇と書いたのは、時代に通行した持統の名を出すことで、天皇の薬師三尊像造立を世に広めようとしたのであろうか。講堂条では、流記帳云として、藤原宮御宇天皇による繡佛像一帳の発願・施入の記事を挙げている。一方、金堂条では流記文の代わりに、その略抄文「已上持統天皇奉造請坐者」を記したということであろう。『薬師寺縁起』作者の書いた略抄文は、流記からの引用ではなく、また隠密の書き込みや捏造などでもない。よって結論を言えば、関野氏以来議論されてきた諡号や引用形態に関する問題は、初めから存在しなかったのである。また、「已上流記文云」の意味は右に見たとおりであるから、しばしば疑問視される「已上持統天皇奉造請坐者」の信憑性にも、問題はないことが結論される。

ここまで『薬師寺縁起』作者の記述に従って、「已上持統天皇奉造請坐者」を述べた文を忠実に読んできた。その中で、表には出ていないものの、重要な意味を持つのが流記文である。作者は、流記を参照しつつ金堂条を書き、流記文を略抄して「已上持統天皇奉造請坐者」とした。その流記文を少しでも具体的な形に表すことができれば、状況に対する理解も深まるはずである。それを第三節で行う。

二、流記について

天平十九年（七四七）に、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下、『大安寺資財帳』）と『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下、『法隆寺資財帳』）が作成された^[5]。『薬師寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下、『薬師寺資財帳』）も作成されたはずである。『大安寺資財帳』と『法隆寺資財帳』では、縁起文に続く資財・物品の記載方式として、まず仏像をまとめて挙げ、次に經典類をまとめて挙げ、次に金・銀等の物品をまとめて挙げる。こうして次々に記載してゆく。そして、各物品が仏法僧のどれに帰属するかを、丹念に記録する。上原真人氏はこの方式を「仏法僧中心」の記載法と呼ぶ^[6, 十四頁]。この記載法は、物品をまとめた項目に「合」字を冠し数字を大字で表し、内訳として各物品の名称と数量を記す。内訳の数字は基本的に漢数字である。記述は簡潔を極める。

『大安寺資財帳』の奥書の一部に以下のようにある。天平十八年十月十四日、勅を奉じた左大臣（橘諸兄）の命を受け、僧綱所が大安寺の三綱に牒を発して、大安寺縁起并流記資財物等を子細に勘録するよう指示した。天平十九年二月十一日、勘録は終了し僧綱所に提出された。天平廿年六月十七日、僧綱は押印し、「立爲恒式、以傳遠代者」と述べて大安寺縁起并流記資財帳一通を、寺家に渡した。

『法隆寺資財帳』の奥書は大安寺のものとは随分違うが、三つの年月日は全く同じである。よって『藥師寺資財帳』の場合も同じであろう。天平二十年六月に資財帳が渡された翌年、二十一年四月に天平は終わるから、天平十九年より後に作成された天平の流記なるものは、部分的な改訂版の可能性を除けば、存在しない。一方、天平十八年以前に作成された本格的な流記資財帳が存在したのか、筆者は知らない。しかし、存在しなかったからこそ、左大臣までが乗り出した働きかけと大々的な準備の結果、初めて天平十九年の流記資財帳が作成された、とも言える。また『藥師寺縁起』に引用された流記の記事の断片に、『大安寺資財帳』の記事とよく似た記載のものがある（例えば、寺院地の記事）。こういった流記が、天平十八年以前に既に藥師寺に存在したということは考えにくい。恒式として遠代に伝えるべく、大切に保管されてきた天平十九年『藥師寺資財帳』が藥師寺の流記である、と考えるのが自然であろう。

ところで、藥師寺本『藥師寺縁起』に付載されている永保二年（一〇八二）の文書に、

．．．去天平及寶龜年中注録寺家流記云、寺院地十六坊四分之一、．．．

の記事がある。去天平及寶龜年中注録寺家流記は、天平の流記と宝龜年間（七七〇―七八〇）に作成された流記、を意味するものである。この記事によって、二つの流記が永保二年までは藥師寺に残っ

ていたことが知られる。ここに言う天平の流記とは、右に述べたことから、天平十九年の『藥師寺資財帳』ということになり、これが『藥師寺縁起』に引用されたものと考えられる。

『諸寺縁起集』の西大寺縁起中に、藥師寺舊流記資財帳の記事が条文の形で十数条記載されている。それについて以前議論した結果^[7]に、若干の訂正と補足を加えたい。なお考える資料は醍醐寺本によった^[8]。まず次の記事が興味深い。

藥師寺舊流記資財帳云、一金銀銅鐵錢鈿并供養具、絶、糸、綿、長布、交易庸布、紺布、袂帳布、白米等有員、繁故略是、右以養老六年（壬戌）十二月四日納賜平城宮御宇天皇者、

この金、銀、銅、鐵、錢、鈿、．．．は納賜品目で、藥師寺舊流記資財帳から対応する項目を拾い、記載順序に従って並べたものである。これに対して、『大安寺資財帳』から右の項目を拾って、『大安寺資財帳』の順序に従って並べると、次のようになる。

（佛像、經典）、金、銀、銅、鐵、鈿、錢、供養具、．．．、絶、糸、綿、長布、庸布、交易布、紺布、．．．、（寺院地、堂宇）、．．．

納賜物品だけに限らずに、藥師寺舊流記資財帳の全項目について見れば、一致する項目は当然もっと増えるはずである。多くの項目とその記載順序が一致していることは、藥師寺舊流記資財帳と『大

『安寺資財帳』の構成が、極めて近似していることを意味する。もう一つ重要なことがある。それは、左側に天皇による納賜の記載があることで、筆者はこの形式を定型と呼ぶ（第三節で述べる）。ここにあるのはその貴重な例である。

薬師寺舊流記資財帳の作成年代については、次の考え方が^{〔7,8,9〕}ある。

薬師寺舊流記資財帳の利稲の記事中に安房の国が見える。安房の国が存在した期間と、天平三年（七三一）の年紀のある記事から考えると、薬師寺舊流記資財帳の作成年代は、天平三年から天平十三年（七四二）の間か、または天平宝字元年（七五七）以降となる。筆者は、薬師寺舊流記資財帳と天平十九年の『大安寺資財帳』との近似性から、天平十三年以前でなく、天平宝字元年以降の作成と考えた。しかしこの判断は適当でない。稲の収穫量は毎年変わるから、それに応じて記事が差し替えられた可能性がある。無論それは、新資財帳の作成を意味しない。『大安寺資財帳』と『法隆寺資財帳』において、稲に関する記事がほとんど最後尾に置かれていることが、差し替えを暗示している。薬師寺舊流記資財帳は、天平宝字元年以前に作成されたかもしれないのである。

このことに関連して、三寺の資財帳の次の記事に注目したい。

『法隆寺資財帳』

合處處庄肆拾陸處

合庄庄倉捌拾肆口 屋壹佰拾壹口

『大安寺資財帳』

合處處庄拾陸處

庄庄倉合廿六口 屋冊四口

薬師寺舊流記資財帳

處處庄三十三所

庄々倉合一百三十口、屋六十三口、

資財帳の記述から見て、「處」とは、各地に存在する庄を地区ごとにとまとめたもの、と理解される。庄は、その属する處の一部として考えられていたようである。「處處」と「庄庄」は、仏像の寄進者達を示す「人人」と同様な意味であろうか。それにしても、いささか特異な感が否めなく、寧ろ「處庄」と「庄倉」が自然であると思われる。よって『法隆寺資財帳』で言えば、「合處處庄肆拾陸處・舊流記資財帳の記事は、一般的に言って、『諸寺縁起集』では杜撰に編集されたようで、原文とは異なる部分がある。例えば或る条文の「同天皇」の語など、原文のものではない。右に挙げた薬師寺舊流記資財帳の記事にも疑わしい部分が多い。しかしそれにも拘わらず、これら三つの記事が同種の文から成っていることは明白であり、またその文は独特である。このことは偶然の結果ではなく、薬師寺舊流記資財帳と『大安寺資財帳』及び『法隆寺資財帳』との近似性を示すもの、と考えられる。以上の諸点から判断して、薬師寺舊流記資財帳は天平十九年の『薬師寺資財帳』に他ならない、と結論し

たい。

三、流記原文の推定・復原

金堂条の「已上流記文云」より前の部分を、次のように三分割して表示する。

- ① 金堂一字、二重二閣、五間四面、長八丈七尺五寸、或七丈八尺、廣四丈、或五丈一尺五寸、或五丈一尺、或四丈五尺、柱高一丈九尺五寸、
- ② 佛壇長三丈三尺、廣一丈六寸、高一尺八寸、以馬腦爲臺、石以瑠璃爲地敷之、以黃金爲繩堺道、以蘇芳造高欄、以紫檀爲内殿天井隔子、以鐵繩釣天蓋、寶蓋四端交立白輝寶珠及半月等、不可稱計、
- ③ 其堂中安置丈六金銅須弥座藥師像一軀、円光中半出七佛藥師佛像、火炎間刻造無數飛天也、左右脇土日光遍照月光遍照并像各一軀、已上持統天皇奉造請坐者、

以下の議論で重要な働きをするのは「奉造請坐者」である。この表記については内藤 栄氏の緻密な研究が報告されている。^[10] それによると、これは天皇・皇族が「造立しお招きした」ことを意味する

文末の表現で、仏像・繡仏の造立・施入の場合だけに用いられた。仏像以外では、經典類の施入の場合に「請坐者」を用い、更に仏像・經典類以外の物品の施入の場合は「納賜者」を用いた。これら三種の表記は、奈良時代の流記資財帳に特有なものであることが指摘されている。

更に、意味だけではなく、用法に注目すべきである。この表記の見える『大安寺資財帳』と『法隆寺資財帳』で観察すると、まず施入した仏像または繡仏の項目を挙げ、その左側に、造立・施入者の甲天皇を記して「右甲天皇奉造請坐者」とする。また、年月日を可能な限り詳細に記す。經典類と諸物品の場合も同様で、違いは「請坐者」と「納賜者」を用いることだけである。これらの用法は定型とすべきもので、常に嚴格に守られていることが分かる。そしてこの形式には、「仏法僧中心」の記載法が最も適しているようである。宝龜十一年（七八〇）の『西大寺資財流記帳』^[5]では「奉造請坐者」は見られないし、記載法も異なっている。なお「奉造請坐者」の用法については、『大安寺資財帳』と『法隆寺資財帳』に見る豊富な例の他に、藥師寺舊流記資財帳の天皇納賜の記録があり、これは、藥師寺の流記における同じ定型の存在を示唆していて心強い。

ここで、「已上持統天皇奉造請坐者」に対して存在する流記文を、具体的に記すことを考える。その流記文は、第一節で見たように、「已上持統天皇奉造請坐者」の内容を表しているから、やはり天皇によ

る薬師三尊像の造立・施入の文であり、よって文末は「奉造請坐者」となっている。従って流記には、薬師三尊像が、造立・施入者の天皇名と共に定型どおりに記載されている。また薬師三尊像の造立は、持統天皇八年（六九四）の藤原宮への遷居以降のこと、とするのが無難であろうから、持統天皇の称号は、藤原宮御宇 天皇とすればよい。よって、「已上持統天皇奉造請坐者」の流記における原文は、「右藤原宮御宇 天皇奉造請坐者」となる。次に薬師三尊像の表示を求めよう。まず、幸いにして『法隆寺資財帳』に「金涅槃薬師像壹具」の記載があるから、これにならって「金涅槃薬師像一具」を薬師像とする。またそれに準じて「金涅槃菩薩像二具」を二脇士とし、『大安寺資財帳』及び『法隆寺資財帳』の記載例を参考にして、薬師三尊像を次の形に表す。薬師像はこれでよいとして、二脇士の正しい表記は分からないが、薬師三尊像がこの形式で簡潔に表されるのは確かであろう。

金涅槃薬師像一具

金涅槃菩薩像二具

右藤原宮御宇 天皇奉造請坐者

この場合、「已上持統天皇奉造請坐者」の「已上」と「右藤原宮御宇 天皇奉造請坐者」の「右」は、共に薬師三尊像を指している

から、「已上持統天皇奉造請坐者」の内容は「右藤原宮御宇 天皇奉造請坐者」に表されている（同じ内容である）。更に、作者は「右藤原宮御宇 天皇奉造請坐者」を見て「已上持統天皇奉造請坐者」を記したと考えられるから、「已上持統天皇奉造請坐者」を、作者による「右藤原宮御宇 天皇奉造請坐者」の略抄文と解することに問題はない。よって、「右藤原宮御宇 天皇奉造請坐者」を流記文として、「已上持統天皇奉造請坐者、已上流記文云、今畧抄之」が成立する。これは、第一節で考察した結果を、実例によって確認したのになっている。

ここまで、「已上流記文云」の「已上」の指すものとして、「已上持統天皇奉造請坐者」を考えてきた。次に、この「已上」の範囲を文③にまで拡大できるのか、考えてみたい。そのため、文③に対する流記文として、「右藤原宮御宇 天皇奉造請坐者」と「金涅槃薬師像一具・金涅槃菩薩像二具」の合併を考える（右の三行）。この時、「③、已上流記文云、今畧抄之」は成立するか、ということである。第一節で見たように、文③の薬師三尊像の記述部分の内容を、端的に薬師三尊像としたのは、作者である。従って、文③の内容は、この流記文三行に表されていると言える。しかし逆に、文③を、流記文三行の略抄と見ることができるだろうか。これは、「金涅槃薬師像一具・金涅槃菩薩像二具」を略抄して、文③の薬師三尊像の記述部分になるか、ということである。この件は、作者が略抄をどのよう

に考えていたかによって決まるもので、それは分からない。そこで一つの考え方として、以下のようにした。文③は、「已上持統天皇奉造請坐者」と薬師三尊像の記述部分とが一体になったものであり、同様に、流記文三行は、「右藤原宮御宇 天皇奉造請坐者」と薬師三尊像二行とが一体になったものであるから、文③と流記文三行の対応を考えるのが自然であろう。よって、文③を流記文三行の略抄文と考えて、「已上流記文云」の「已上」の示す範囲を文③とする。なお、通説として考えられているその範囲は、①・②・③の全体である。^{〔8,9,10〕}ただ東野治之氏は、①を除いているようである。いずれにしても、これらの範囲は更に広い。筆者には想像として言えることはあるが、それ以上は考えが及ばない。

【謝辞】

東北大学大学院文学研究科教授長岡龍作先生、助手河野喬紀先生には大変お世話になりました。ありがとうございました。また査読の先生からは有益なご指摘をいただきました。あつく御礼申し上げます。

【文献】

- 〔1〕 關野 貞『薬師寺金堂及講堂の薬師三尊の製作年代を論ず』『史學雜誌』十二―四、明治三十四年
- 〔2〕 藤田経世『校刊美術史料 寺院篇 中巻』中央公論美術出版、昭和五十年
- 〔3〕 藤田経世『校刊美術史料 寺院篇 上巻』中央公論美術出版、昭和五十年

『薬師寺縁起』金堂条の解釈

和四十七年

- 〔4〕 戸川芳郎監修『全訳 漢辞海 第三版』三省堂、二〇一一
- 〔5〕 竹内理三編『寧薬遺文 中巻』東京堂、昭和三十七年
- 〔6〕 上原真人『古代寺院の資産と経営——寺院資財帳の考古学——』すいれん舎、二〇一四
- 〔7〕 望月 望『薬師寺金堂薬師三尊の移坐の問題』『美術史学』三十五、二〇一四
- 〔8〕 東野治之『文献史料からみた薬師寺』『大和古寺の研究』塙書房、二〇一一
- 〔9〕 長谷川 誠『長和の薬師寺縁起に引用の天平「流記」——南都造像史研究拾遺——』『筑波大学芸術年報』一九八三、一九八三
- 〔10〕 内藤 栄『薬師寺縁起金堂条における流記引用について』『鹿園雑集』十五・十六、平成二十七年

SUMMARY

A New Understanding of the Kondō Section of the Yakushiji Engi

Nozomu MOCHIZUKI

In the Kondō section of the Yakushiji Engi (Guidebook to the Temple Yakushiji, 1015), there is a passage that was apparently quoted from Ruki (List of Temple Properties), compiled around the middle of the Nara period and lost in the present day. The passage states that Jitō Tennō (Empress Jitō) created the Yakushi Triad, the principal statue of Yakushiji. If the passage is originally a sentence of Ruki, then the statement contradicts the well-known fact that the appellation “Jitō Tennō” was first used late in the Nara period.

As early as the year 1901, Tadashi Sekino expressed his strong suspicion that the passage had not been quoted from Ruki, in which the reasoning is based on his own observations. Many authors have worked since then to make the truth clear about the statement, but no satisfactory explanations are obtained.

In this paper, we shall show the following. The writer of the Yakushiji Engi rewrote a sentence of Ruki, and the passage is the result of this rewriting. The passage has almost the same meaning as the original Ruki sentence. The appellation “Jitō Tennō” conforms to common usage in the Heian period so that no contradiction occurs. The key to our conclusion is a phrase at the end of the passage that has been neglected for a long time, which is “今略抄之” (In fact, we have rewritten a Ruki sentence). This is the writer’s comment explaining what the passage means, and we can see that the rewriting is not a fabrication.